

「先進国日本、発展途上国中国」。中国が目覚ましい発展を遂げた現在においても、日本人の胸奥にはこのような認識が残っていないか。私を含め日本の世論は、いまだに中国を発展途上国であり、日本よりも先進していない国であると信じていたいようである。しかしながら、このたびの訪中を通じて、私は胸奥にあるこのような低劣な認識を大きく改めることとなった。そこで、本文では、訪中経験の何が私の認識を改める要因となったのか、また認識の変化により再構築された私の捉える中国とはどのような国であるのかに関して言及したいと考える。

はじめに、この度の訪中は私にとっての初めての中国本土訪問の機会であった。私は大学において中国の歴史を専攻し、研究を行っているにも関わらず中国本土への渡航経験を持ち合わせていなかったのである。加えて、訪中以前の私の中国に対する認識というものは、経済・工業の発展に社会倫理の向上が追い付いていない国といったものであり、特に中国人に対しては、人道的倫理つまりモラルの向上が不十分であると評価を下していたのだ。

それでは、なぜ私がこのような偏見を改めることとなったのか、最大の要因は北京城市学院において、現地の学生と交流する機会を与えられたことだろう。この交流を通じて私は、私と彼らの間に存在する語学学習に対する熱意の差を感じ、大きな衝撃を受けたのである。それは、中国語を履修しているながら、中国語でのコミュニケーションがままならない自分に対する憤りであると同時に、何より彼らの日本に対する大きな熱量と豊富な知識への感嘆であった。中国語を第二言語として履修していたにもかかわらず、中国語でコミュニケーションをとることもままならなかった私、対して日本語を学習し、日本語を流暢に操る彼ら、私たちの間に語学学習に対する大きな意識レベルの差が存在することは確実と言えるだろう。ここで私は、過去、中国人に対して人道的倫理の伴わないといった評価を下していたことを深く省み、改めることとなるのである。日本に対して常に敬意を持ち合わせ、知識を増やそうとする彼らと、中国に訪問しているにも関わらず、中国の知識も十分ではなく、中国語でさえもままならない私。相手国への敬意もモラルも持ち合わせていないのは私のほうであったのだ。ここで私は、訪中に際しての事前研修で告げられた「文化の違いがあるということを理解しましょう」ということばを思い出すのである。中国人にモラルが不十分であると、今までの私は評価を下していたが、これを文化の差と理解することはできないだろうか。自国と相手国の間に存在する相違点にモラルの差といった決断を下すことは容易であるが、このような相手国への敬意を忘れた理解の先に両国の進展があるとは思えないということに気が付かされたのである。

この度の訪中を通じて、私は中国という国を、発展途上国であり、発展に伴う社会倫理の不十分な国であるなどといった、軽んじた評価を下していたことを改めて深く省みることとなった。異なる文化で生きている以上、行動や考え方に違いがあるのは当然のことであり、この事実を「文化の違い」と前向きに理解できるかどうか、これからの日中関係発展のため、求められる姿勢なのだろうと考えるのである。

「中国と日本の架け橋となるためには」 泉 妃名子

今回の訪中を通して、中国という国が好きになり、中国の語学、文化や歴史など、もっと中国について知りたくなりました。中国へ訪れたのは初めてだったのですが、想像していたよりもはるかに、何もかも大きいことに驚きました。また、私は観光学部で学んでいるので、訪日中国人の爆買いやゴミのポイ捨て問題のような少し悪いイメージも持っていました。しかし、百聞は一見に如かずということわざは本当で、今回の渡航をきっかけに中国の魅力に惹かれました。マクドナルドやピザハット、また日本のお菓子の名前などの外来語も全て感じて表記されていることも不思議で魅力を感じました。本感想文では、訪中前と訪中後の中国・中国人に対する考え方の変化、次に、この渡航が私にどのような影響があったか、最後に、隣国隣人として今後、どのように付き合っていくかの順に書きたいと思います。

中国を実際に訪れて、これまで感じていた中国人観光客のマナーが悪いというイメージが変わりました。その気持ちや考え方の変化のきっかけは、日本人も旅行先で同じことをしているかもしれないと感じたからです。帰国前日、マートでの自由行動の時間がありました。集合時間の前になると、レジに並んでいる列のほとんどが、私たち日本人でした。少し怒った表情の地元の買い物客、困った表情の店員の方がいました。この時に私は、日本人も爆買いしていると思われるのだろうと感じました。旅行先に行けば楽しくて、普段より声を大きくなりうるさくなるのは、私もそうかもしれないと気づきました。自分の旅行先での変動を見直そうと思ったと同時に、訪日中国人たちは、日本での旅行を楽しんでくれている証拠なのかなという考え方に変わりました。

この訪中で最も印象に残り、私に影響を与えた出来事は、友達と偶然再会したことです。人民大会堂で行われた日中大学生人民交流大会の時に会いました。昨年夏に、別のプログラムで仲良くなった、北京外国語大学で日本語を専攻している学生

です。そのプログラムは、海外の国で日本語を学んでいる学生を日本に招待するというもので、日本人学生もサポート側として少数募集があったため応募し参加しました。人民大会堂に到着して、少し会場内を見て回っている時にばったり会いました。このような形で再会すると思っていなかったし、あの大きな会場で、たくさんの人々がいる中で、見つけることができたことにも感激の気持ちでいっぱいでした。こういう繋がりを大事にし続けることが国際交流の友好になるのだと思います。これからも国際交流のチャンスには積極的に参加し、より多くの国のことを知っていきたいです。また他国からの視点で日本という国について学ぶことにも興味があります。

隣国隣人として友好関係を築くためには、相手を知ろうとすること、受け入れることが根幹であると感じました。もちろん中国のことが嫌いな日本人もいれば、日本人のことが嫌いな中国人がいて、その人たちを0にすることは不可能かもしれません。しかし、お互いの良いところを認め合い、好きになる人を増やすことは可能です。そのために、私は今回の研修で、現地の方が親切にしてくれたこと、食べ物が美味しいこと、建物や歴史の壮かさなどの中国の魅力を、まだ中国について知らない人たちに伝えていきたいと思っています。

私が大学入学前に立てた目標の1つに、世界と日本の架け橋のような存在になると決めました。今回の訪中団に参加したことは、その目標にまた少し近づけた気がします。そして中国で今回出会った友達にまた会いに行くという新たな目標ができました。ありがとうございました。

「中国への留学への第一歩」 永原凜太郎

今回の日本少年代表団、友好協会分団としての訪中を終えて、大変収穫の多くこれからの学びを深める機会だったと思います。私としては、二回目の中国訪問ということでしたが、一回目が幼いころだったことや大学において中国語を学び始めてから初となる中国訪問、それに加えて、題にもあるとおり、中国への留学を考えているということで、とても良い刺激を多く得ることができました。

まず初めに、留学をするなかで必須となってくる、中国語能力の自身の現在地を知ることができたと思います。上記した通り、私は今年の春に大学に入り、第二外国語として、週ニコマの授業で中国語に取り組んできました。今回の訪中は、その学んできた中国語を、中国で使う初めての機会でした。まだ授業としては文法も終わってはいませんが、今まで学習した文章や単語を実際に使用してみることができました。その中で、言いたいことが現地の人に伝わることもありましたが、せっかく自分の伝えたいことを伝えられても、自分が質問したことや話したことに対する返答は自身の使える中国語よりもレベルの高いことがほとんどで、相手の言いたいことが理解できず、話が續かないことや、それ以前に自分の伝えたいことを表現できない、発音の問題で伝わらないということが多々ありました。大学で絵の学生同士の交流では、英語に逃げてしまうということが多々ありました。そういったことから自分の中国語に未熟さを感じ、これからの中国語学習に取り組んでいきたいと思いました。

また、様々な形で中国に関わりながら現在大学で学んでいる多くの大学生と交流できたことは、自分の今後の学びに対して大きな刺激になりました。自分は一年生でしたが、多くの先輩方が、高いレベルの中国を身に付けていたり、また先輩方に加え、自身と同級生であった他の一年生が自分より進んだ中国や中国語の学習を行っていたりと、驚きを感じました。特に、同じ班であった外国語学部一年生の友人は、2月から一年間の中国への留学が控えていることもあり、物怖じせずに何度も中国語で中国人に話しかけ、その挑戦を楽しんでいました。彼の自分がこれからより一層、熱心に中国語や中国に対して取り組んでいかなければならないと強く感じました。

加えて、今回の研修を通して、中国の文化に直に触れることができ、より中国への興味、関心が高まったように思います。昼夜の食事で食べることができた、中華料理は大変美味しく、北京だけでなく、他の地域の地方料理等も食べてみたいと感じました。食文化からその地域性や中国のおもてなしと日本のものとの違いを感じられたのはよかったです。また、万里の長城においては、高校の時の世界史で学習した中国史の始まりと言える秦、始皇帝の時代から受け継がれてきたものだと思います。その壮さに圧倒されました。今回での行けなかった歴史的な名所や自然に富んだ素晴らしい場所が中国には多くあります。今後中国に行く機会にそのような場所を訪れたいと思います。

最後に、今回の中国での研修は、自分の今後の活動に影響を与えるような様々な経験ができました。今回の訪中での経験を胸に、来年の3月に行く約1ヶ月の台湾での語学留学に取り組み、そして、将来的な中国への長期留学を見据えて今後、中国語を学んでいったり、中国に関わっていったりできればと思います。

「訪中を通して学んだこと」 岡崎勇介

私が、大学生訪中国に応募したのは、中国の経済と文化について、実際に観て知りたいと思ったからである。経済では、中国は世界第二の経済大国として、授業中にもよく出てくる。技術力でも世界から評価されるようになっていて、ニュースでよく取り上げられている。特に、ベンチャー企業が多く誕生し、成長する好循環が、中国を加速的に成長させているイメージがある。この、中国の凄まじいエネルギーはどこから来るのか。そして、実際にどれだけの経済発展を遂げているのか、見てみたいと思ったことが一つのきっかけである。文化については、近年訪日中国人が急増する中で、ゴミや観光地でのマナーなどが取り上げられているが、メディアの情報だけでは決めつけることはできないと思い、実際に中国ではどうなのかを見たいと考えた。

実際に中国に行くと、まず北京市の空港の大きさに驚いた。中国はたくさん的高層ビルや工場で、排気ガスがもくもくしている大都市というイメージだったけれど、北京市内は想像とは違っていた。大都市というよりは、歴史のある街並みで、排気ガスもそれほど排出されているようには感じなかった。市内をバスで移動していると、2022年冬季北京オリンピックに向けて建設が進んでおり、また交通渋滞緩和に向けた鉄道のインフラ事業が行われている様子を見ることができた。中国は国土が日本の約25倍、人口が日本の約11倍である。何をしても、場所と労力がある中国の強大さが垣間見えた気がした。3日目、学校交流をした。中国人学生はとても優秀で、流暢な日本語や英語で話しかけてくれた。中国人は日本人が嫌いな人が多いと思っていたけれど、歓迎してくれているのがわかって本当にうれしかった。4日目、万里の長城に行った。どこまでも続いているような約6000キロに及ぶ長城が数百年も前に作られたのだと思うと、これを長い歴史の中で繋いできた中国の偉大さがよくわかる。ショッピングに行った際に、副団長の大藪さんとお話をさせていただく機会があった。日本には、長い歴史の中で中国から数々のものが伝えられてきたという内容のお話を伺った。そうした中で、形を変えてきたものがあるらしい。例えば囲碁や将棋である。日本では間に挟んだ碁は取って数えるが、中国では数えないらしい。また、将棋では、日本は取った駒を使えるが、中国では使わないようだ。これには、日本と中国に考え方の違いがあるのだと教えてくださった。日本は取った駒を捕虜にして使おうと考える。中国は減っていく戦力の中でどう戦うかを考える。一見、手数が多い日本の将棋の方が難しそうだが、取った駒が使えず、減っていく駒の中で戦う分、考えながら動かしていかなければならないという。中国は長い歴史の中で、あらゆるものを生み出してきた。それを、日本は日本流に形を変えながら取り入れてきた。日本を知るためにも、もっと中国についても知りたいと思った。5日目、起業関連施設を訪問させていただいた。この施設では、起業する人にオフィスを提供するビジネスを行っているようだ。中国では、競合も多数いるビジネスらしいが、日本では有名になっていないのか、あまり馴染みのないビジネス形態だと感じた。中国の起業家は、この施設を利用することで、低コストで手軽に仕事場を確保することができる。また数多くの起業者と、共通の施設を使うことで意見を交換したり、交流を深めて情報を得たりしながらビジネスを行うことができる。さらに、協同でビジネスに発展することもあるようだ。こうした、かつてのアメリカのシリコンバレーを彷彿とさせるような環境が中国にはある。このような環境がイノベーションを生み出し、中国の急成長に繋がっているのだと思った。夜の市内をバスで移動しているとき、ビルに明かりがつかっていないことに気づいた。中国は定時に仕事を切り上げるらしい。日本は働きすぎだとガイドさんは言った。中国がうらやましく感じた。

今回の訪中を通じて、中国の様々な場所に行き、数多くの中国人を見て、何人かの中国人と話をしたけれど、日本で報じられているような悪い印象は感じられなかった。メディアは、一部を切り取って報道するから、それがすべてであるかのように感じるけれど、決してそうではないことがわかった。それに、報道されているような事実があるにしても、そこには文化や歴史などが含まれており、事実だけを見て、良い悪いとかの判断をすることは良くないと思った。中国は、とても良い場所で中国人はとても優しくかった。中国はとても広いから、色々な場所にまた来てみたいと思う。

「日中の懸け橋となるために」 数馬未夕

私はおもに3つの理由から中国を訪れたいと思いました。1つ目は中国に住んでいた経験があり、そのころからどのように変化、発展しているのかを知りたかったからです。2つ目は中国の偉大さを知って尊敬できるようになろうと思ったからです。3つ目は中国語を勉強しているので実践してみたかったからです。

私が中国に住んでいた3年間はちょうど反日運動が盛んな時期でした。外で遊ぶのを控え、タクシーでは国籍を隠して乗り、日本人立ち入り禁止のお店もたくさんありました。多くの中国人は優しくかったのですが、一部の中国人は日本人に対してあまりよく思っていないように感じていました。しかし、今回中国に訪問していたら出会う中国人みな、日本のことが大好きとってくれて、とても嬉しく思い、同時に時代が変わったなど実感しました。また、中国の大学生はフレンドリーで、自分が抱く中国人のイメージとかけ離れていたのが驚きました。中国に行く前は「中国人は愛想が悪い」という勝手な偏見を持っていました。しかし、今回訪れてみるとどこでも優しく笑顔で対応してくれました。例えば天壇公園に行った際、私たちが日本人だと気づくと1人の中国人が笑顔で話しかけてくれました。また道を尋ねてもゆっくり聞き取りやすい中国語で答えてくれました。市場で値段交渉をするときもお友達のように楽しくお話してくれます。訪中前は中国人に対してマイナスのイメージがやはり多かったのですが、実際に今回訪れ

て見ると中国人の人柄には惹かれるところがたくさんありました。メディアでは情報価値が高いことから中国の悪いニュースが多く取り上げられます。そこでその情報をうのみにせず、中国人に対して壁を作らず接してみると良いところがたくさん見えてきます。一度偏見を全て取っ払ってみるべきだと考え方が変わりました。

また中国を訪れると、中国人が中国の歴史を尊敬していることを知りました。日本は歴史をそこまで深く考えない傾向があると思います。日本人はもっと自国の歴史について知るべきであり、中国を訪れる際は中国史を知っておくことで中国の偉大さを知り、尊敬できるのではないかと思います。

中国と日本は隣国であり、常に政治的関わりを持たざるを得ません。国政によって友好な年と緊迫している年に分かれてしまいます。それにより中国人と日本人の仲が良好でなくなってしまう。しかし、最近はSNSなどを活用して、「必ずしも国の意見が国民の意見ではない」ということが伝えられるようになりました。今回の交流を通して、多くの若い中国人が日本のことを好いてくれていることに気づけたように、中国人もまた「日本人は中国に対して尊敬の気持ちを持って交流している」ということを理解してくれたのではないかと思います。これからの日中関係は若い世代にかかっていると思います。今回日中友好協会が与えてくださった訪中の機会です。有意義な交流をすることでお互いに対してよいイメージを持ち、そのことを幅広い人に伝えることで最後は国家同士でよい関係を保てるのではないかと思います。今回の訪中の経験を通して、私には一つやってみたくて良かったです。それは日中関係の良さを伝えるSNSと一緒に運営することです。一緒に交流をしている写真や動画を載せることで日中間に壁をなくし、見た人全員が日本や中国に親しみをもちてもらえると思います。小さなことからですが、その積み重ねで日中間に良好な関係を築き、日中の懸け橋になれるのではないかと思います。貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

紀野 朱厘

今回の訪中への参加は私にとってとても良い経験になりました。旅行では経験することのできない様々な貴重な体験や、自分では組み切ることのない充実したスケジュールのおかげで私の人生の記憶に残る素敵なものになりました。また、大学で中国語を勉強している私は、自分の中国語力の未熟さと中国語の難しさを改めて実感しました。また、もっと中国について知りたいと思われました。まだまだ発展段階の中国には日本とは違う雰囲気が漂っていました。今後の劇的な経済成長、街の発展など想像するだけで恐ろしいほどでした。

まず、貴重な体験だと思ったのは、人民大会堂に入ることができたことです。日本で言う国会議事堂であり、日本の国会議事堂にさえも入ったことがないのに、まさか中国で入ることができるなんて光栄でしかありませんでした。見るだけで充分価値のある建物の中に招待状を頂いて入ることができて本当に印象に残る出来事でした。

また、中国留学を控えている私にとって留学先の環境など様々なことを理解することができました。私は上海にしか行ったことがなかったため北京など北部の気候についてよく知りませんでした。さらに、私が留学する場所は天津なので防寒対策についても理解することができました。また、発展している地域もあればローカルな雰囲気が漂い場所もあり気を付けるべきことなどもよくわかりました。

今回の訪中では私の中で中国人に対するイメージは大きく変わりました。私の勝手なイメージではよくニュースで見る少し気性が荒く人に対するあたりもきついイメージでした。でも、実際に行ってみると中国人はとてもやさしかったです。特に、観光地にいる中国人は私たちを助けようと必死で伝えてくれました。もし中国語がうまく通じなかったときは英語を使って話してくれたり、それができない中国人は翻訳を使うなどして私たちにたくさんのことを教えてくれました。そんなにもやさしい中国人であるのに偏見で少し悪いイメージを持たれがちです。それはきっと日本のメディアが中国の環境問題や揉めている一部始終など悪い面だけをあえて報道し日本人に伝えるため、日本からの中国に対するイメージが悪くなっているのだと痛感しました。なので、私は自分の伝えられる範囲で中国人の良さややさしさなどを広めていきたいと思いました。こんなにもいい人たちがたくさんいる国なのに悪いイメージばかりが募るのはあまりにも好ましくないことであります。今の世界は、インターネットが発展しよいことも悪いことも一瞬で世界に広めることができます。なので私は SNS を使ったり口頭で伝えたりなどしてどんどん中国の良さを伝えたいと思いました。私ももっと人助けのできる人になりたいと強く思うきっかけになりました。中国人を見習い、韓国客や日本人でも困っている人を見つけたらすぐに声をかけなんとかして少しでも役に立てるようにしていきたいです。

今回の訪中で私は多くのことを学ぶことができました。この経験を活かし今後の自分の人生をより良いものにしていきます。

「訪中を経て考えた本当の中国」 小林亜美

今回、北京へ行くまでには一度だけ中国へ行ったことがあった。昨年夏に初めて、中国の瀋陽へ行った。その時は初の中国だったので、かなりのイメージの変化があった。なので、今回の訪中でそれほど変わることはないだろうと思っていた。しかし、2回目の中国でもやはり考え方の変化はかなりあった。

まず一つ目は、中国に対する愛国心を感じるが多かった。道路や店のあちこちに愛国心を感じさせるような場面が多々あった。例えば、四文字熟語でよくわからない文字を書いていたたり、店に国旗を飾っていたりと、とても中国らしいなあ、...と思った。日本ではまず見るができない光景だった。もし日本でそのような光景があると、みんなビックリして写真撮影をするだろうと思う。それが認められ、当たり前になっているのがすごいし、中国だからこそできているのだと思う、社会主義国と言われる所以はこうゆうところに点在しているのだろうと思う。

そして二つ目は、中国人がとても真面目だなと思った。中国人学生はみんな大学生になってもテスト前が大変でとても勉強にしていると知って、真面目で、将来を真面目に考えているのだと感心した。一方日本人は大学生になればほとんど勉強することもなく、自分の好きな事ばかりをしていて、中国人学生と日本人学生ではこんなにも違うことがあるのか!と思った。それを知って私は「もっと頑張らなきゃ」と心から思った。自分の好きなことをすることも大事だと思うが、学費が高いことを頭に入れて勉強するべきだと思った。

これら二つのことが特に気になったのだが、それらのことを踏まえて日本と中国の関係を考えていくとすると、日本人は中国人に対して偏見があり、本当の中国を見ることができていると思う。たかが2回中国へ行っただけの21歳だが、少なくとも、そこら辺にいる中国に偏見を持っている人よりは本当の中国の姿を見ることができていると思っている。私が友達に「中国に行く!」と言うと、「えーなんで中国なんか行くん?」「危くないん?」と毎回言われた。私はとてもショックを受けた。そんな偏見を持っている人を少しでも減らしたい。偏見を持っている人に本当の中国を知ってもらいたい、そのためにこの訪中国はいい経験になるに違いない。私はそんな人には「一回中国行ってみよよ!」と言う。教科書に載っている歴史や観光地をいくら勉強するよりも、一度行くのには勝てないと思う。私達の班のモットーである「百聞は一見に如かず」だったので、まさにその通りだと思う。

やはり何度渡航しても発見することはたくさんあり、それが私のこれからの人生に影響を与えているのは間違いない。この貴重な体験を学生のうちにできたことが幸せて、これからの学生生活で色々な所に行き、色々な経験にをし、これからの人生を真剣に考えていきたいと思う。この経験は私にそのことを教えてくれたいい経験となった。

「大学三年生の今だからこそ考えたこと」 澤村 瑛

私は一度中国に訪問したことがあったためいわゆる「先入観」というものはありませんでした。そこで改めて帰国後に考えた中で最も印象に残っていることは中国人達の商売方法です。具体的にはショッピングをする中で日本では決して体験できないような方法がとられていました。まず第一に我々が訪問したショッピングモールではウィンドウショッピング、つまり静かに商品を見て回るという事はありませんでした。近くに客がいれば呼びかけ、時に商品を目の前に持ってくる人もいました。また一度目が会えば説明が始まり、立ち止まれば店内へと案内されるのです。もちろん日本ではこのような営業スタイルはとっておらず、当時はその違いに少し当惑しましたが、改めて今考えてみるとその事実の奥にある本質の違いに気付いた気がしています。その違いとは対人関係における心の「距離」についての捉え方です。詳しく説明致します。

日本では、状況に応じて適度な距離を保ちます。特に初対面の時は互いの共通点を模索しながらゆっくりと距離を縮めていくと思います。つまり急に懐に入り込む人に対しては馴れ馴れしいなど不快に感じるのです。洋服屋で品物を見ているときに積極的にスタッフに話しかけられることが苦手だという人が多いのはこのためかと思います。

しかし、今回のことで中国人たちは日本人と真逆の捉え方をしているのではないかと感じました。あくまでも推測ですが、中国人は一気に相手の懐に飛び込む、または相手との距離を縮めて会話を楽しむのではないかと思います。今回、中国人が中国人に対して売り込みをかける場面に出くわすことができなかったのもこの仮説が正しいかは分かりません。しかし、買い物をしていくなかで彼らは積極的に話しかけて商品の説明や値段交渉を行って客との会話の時間を楽しんでいるようでした。最初に彼らが提示する値段と値下げ交渉後に購入した値段との違いの差とそこから感じる儲けたもん勝ちの雰囲気は遺恨が残るような気もしますが、それも彼らの文化の1つと思えばおもしろかったです。加えて相手の懐に飛び込む方法は会話に限った話ではないかもしれません。スーパーで量り売りを行っているコーナーがありました。このコーナーの特徴は商品がその場で食べ放題である、という点です。何種類ともある商品をいくらでも食べ比べしてよいのです。しかし食べ放題といっても食べるだけ食べて帰るわ

けにもいかないと思い、私は 3,4 個食べたのに対して 30 個以上の商品をつい買ってしまいました。ここでは「与える」ことで懐に入ったのではないかと思います。「食べ放題」という文言で興味をひいて相手の懐に宣伝をかけて、食べた分買わなければ、という相手の心理を誘うのです。こうした中国ならではの商売方法の有効さを私は身をもって痛感しました。

以上、私は今回の訪中を終えて「商売」のなかで根付く中国人達の文化の一面を知ることができたと思います。私は現在大学 3 年生であり社会にもうすぐ出ようとしている身であります。現在グローバル化が進み、中国とのビジネスが今よりも増えていくであろうという中でこのような体験を社会人となる前にできたことは大きな財産になりました。就業後、彼らと仕事をしてみたいと思うきっかけになりましたし、非常に将来が楽しみになりました。

最後に、今回私が参加した 5 号車の団員を率いて下さった四宮様と、団員達に感謝申し上げます。

「本当の中国を知るために」 篠原瑞希

私が訪中を終えて考えたことは、3つある。

1つ目は、アリペイの便利さである。日本では、消費税が増加してからキャッシュレスが広がっている。私は、現金派であり、携帯で料金等を払ったことがなかった。今回中国に行くにあたって、アリペイを日本人も利用できることを知り、利用してみた。過去に中国に行ったときに、中国人が現金をほとんど使わないため、100 元を出すと何度も確認されてお会計に時間がかかったり、あまり大きくないお店ではおつりがなくてお店の人を困らせてしまったりしたからである。

外国のお金は普段使い慣れていないので、お金を出すのに時間がかかることや、間違っただけを出してしまうなどが一切なくなり、すぐに読み取れるので現金を使っているときに比べて、買い物がとても楽であった。お金を使っている感覚があまりないので使いすぎるには注意が必要である。

2つ目は、日本にいたるだけでは正しい情報を得ることができないことである。日本のニュースでは、正しいことを伝えてはいるが、中国に対して良くないイメージを持たせるようなものが多いように感じる。私自身も中国に行く前は、不安が大きかった。しかし、実際に中国に行くと、買い物の時に機械の使い方で困っていると助けてくれるし、お手洗いの場所を聞くとその場所まで連れて行ってくれるなど、中国人の温かさに触れることができた。環境も気になるものはなかった。むしろ、天気の良い日がほとんどで、気温は厳しかったが、万里の長城ではとても良い景色を見ることができた。

研修のときに、「中国は日本の人口の約 13 倍です。なので、日本より悪いところも 13 倍ですが、良いところも 13 倍あります。」という話を聞いた。中国での体験を通してとても共感できると思った。百聞は一見に如かずとあるように、日本にいたるだけでは悪いところがよく目についてしまい良くない先入観や偏見が生まれてしまう。実際に中国を訪れることで、良いところも見ることができ、本当の中国を知ることができると考える。

3 つ目は、外国に行く必要性である。上記にあるように、実際に訪れることで本当の意味でその国を知ることができるので、外国に行き、日本とは違う文化や生活、人に触れることが必要であると感じた。世界遺産を訪れてその偉大さを目にし、中国の歴史を垣間見ることによって、中国に対する尊敬する心が芽生えた。

天安門広場では、外国人だけでなく多くの中国人も訪れていた。街中では、建国 70 周年の垂れ幕が多くあった。看板は、日本では日本語以外に英語で書かれたものもあるが、中国語ばかりあることから中国人の愛国心の強さを感じられた。また、大学での交流で、現地の人との出会いは大切であると感じた。白い鞆に自分の好きな絵を描くという体験の中で仲良くなった学生がいた。彼は、中国語が上手く話せないことが分かったと英語に切り替えてくれたり、天安門について教えてくれたりした。私は、中国語も英語も満足に使えず、彼は日本語が全くできないので、中国語と英語でのやり取りだったがコミュニケーションをとることができた。自分の伝えたいことや相手の伝えたいことを理解できた時はとても嬉しく達成感を感じると同時に中国語を上達させたいというやる気にもつながった。

今回の出会いは小さなものであるが、出会いを通じて中国人、中国についての見方・考え方は大きく変えることができると思う。このような中国との交流できる機会に感謝し、大切にしていきたい。そして私は、たくさんの日本人に中国の良さを伝えていきたい。

「百聞は一見に如かず ～中国の文化・交流～」 武田治

「百聞は一見に如かず」。私は訪中にて、本作文のタイトルにあるように、中国の文化や生活を自分自身の肌で感じました。日中の交流を通して、訪中前に抱いていた中国のイメージや、中国人に対する考えが、訪中後には変わっていました。訪中前と後での、私の考えの違いを、「(中国に対する)気持ちの変化」、「(日本人としての)考えの変化」、「(自分の)人生への影響」の3つに分けて、述べていきます。

1 (中国に対する)気持ちの変化

私は中国に対して、ニュースの報道などから「マナーが悪い」、「横暴」、「自分勝手」というイメージをもっていました。これらの悪いイメージは、中国と日本との、文化の違いや規模(人数)の違いなどを実際に体感し、間違った価値観だったと気づきました。

「人民大会堂」、「天安門城楼」、「中国国家博物館」などの歴史的建造物がある天安門広場にて、中国人の案内人が大声で観光客に注意をしていました。よく聞くと、「写真を撮らないで!」、「1列で入場してください」と注意をしていたのです。一見、中国人が怒っているように見える場面も、その状況を理解したら観光客のことを思い、優しく声をかけているとわかります。

北京城市大学の学生と交流した際も、明るく笑顔で接して下さり、交流している動画を送って下さり親切な対応をしてくださいました。また、デパートで買い物をしているときに、買い物を終えた店にいくと、「You are friends!」と、親密に接してくれて友好的なイメージを感じました。

実際に話してみたりすると中国人の温かさ、優しさ、友好的な人柄が非常にわかります。このように、悪い印象が良い印象に変わりました。日本のニュースや報道でみる中国は、誰かの目で見たものであり、自分自身がみたものではありません。人口が約1.4倍も違うのであれば、良いことも悪いこともその分だけあります。日本のメディアはその悪い部分だけを取り上げている。実際にこの目で見てそう感じました。

2 (日本人としての)考えの変化

私は中国に対して「マナーが悪い」、「横暴」、「自分勝手」などの悪い印象をもっていました。ですが実際に、学校交流や市内見学、ショッピングをすることを通して、中国の文化・生活に触れ、交流することでその印象はなくなり、友好的で人間の温かさがある、非常に良い印象に変わりました。

上にあるように、中国に対して悪い印象をもっている日本人はたくさんいると思います。それらの多くはメディアによる影響が大きいと考えます。メディアによって日本人が悪い印象を持つということは、逆を言えば、良い印象を持つことが可能だということです。中国の良い部分を全面的に推していけるメディアを企画・放映することが理想で、身近なスマートフォンを使って、中国の良い文化、中国人の温かい人柄を、SNS等で拡散することが簡易的にできて良いのではないかと考えました。

このように、訪中前は日中の関係に関心がなかった私も、訪中を終えて、日本人として日中の関係について考えていこうと思いました。

3 (自分の)人生への影響

今回の訪中で一番思ったことが、「もっと中国人と喋りたい、交流したい」ということでした。中国人の人柄の良さは言葉がなくてもわかりますが、喋っていることをすべて理解するほど、中国語が流暢ではなかったため、上手く交流することができなかつたです。次回、中国に行くときは、より中国語を使って交流ができるよう、中国語の勉強をしようと決意しました。中国語を勉強し、交流し、中国の良さを日本人の枠を超え、世界に伝えていけるようになりたいと思いました。今回の訪中がきっかけとなりました。

以上が、訪中を終えて振り返りです。訪中前と後での私自身の変化から、非常に有意義な訪中になったことを実感しました。「百聞は一見に如かず」。この言葉の通り、私の見ていた世界をより広く、より深くする、気づきの多い訪中になりました。

中国と日本は隣接する国ということもあり、今後もより友好的な関係になっていければ良いと思いました。ですが、日中戦争の傷跡から、日中の関係を良く思っていない両国の人はいると思うので、今後の課題として考えていきたいと思いました。

「中国について気づいたこと」 富永光紀

まず、このプログラムに参加した理由として、今現在、大学で中国語を専攻しており、自分の中国語がどれほどのものなのか、北京という場所はどのような場所なのかを知りたくて応募した。また、日本に来る中国人観光客が多く、マナーや爆買などについて

話題になっている中、実際に自分の目で中国を見てみようと思った。

はじめ、行く前までは、中国人に対していい印象を持っていなかった。日本で報道されるニュースの情報を真に受けてばかりいた。大きな声で話す、順番を守らない、無愛想など。しかし、実際に中国に行ってみると、そういった光景はまったくといっていいほどなかった。むしろ、日本のことが大好きで、フレンドリーな人だらけであった。もちろん、多少はよくないと思ったこともあったが、想像もしなかったほど優しい人が多くいた。買い物に行ったときでも、日本人が来たからといって冷たく接してくるわけではなく、お勧めの商品を教えてくれたり、値段の高い商品でも値段を下げてくださいました。自分が気づいたことで、彼らは英語を話すことができない人が多いと思った。そのため、コミュニケーションをとるのが難しかったが、ゆっくり話してくれたり、翻訳アプリを使って話してくれたので、しっかり自分の意思を伝えることができたし、同時に中国語のリスニングにもなるいい機会であった。

一番思い出に残ったことは、万里の長城に行ったことである。現地は凍え死ぬほど寒かったが、登っているうちに徐々に暑くなり、上着などいらなくなるほどになった。また、階段が一段一段大きく、頂上にたどり着くのにとっても時間がかかったが、そこからみた景色はとてもきれいだった。途中、台湾人が日本語で日本が好きと伝えてとても嬉しかった。一緒に行った日本人とも仲良くなることができ、本当にいい時間をすごした。食べ物も、ほぼ毎回中華だったが、日本とはぜんぜん違う本場の味を味わうことができ、最後の日には北京ダックが出てきてすごくびっくりした。こんなもの食べたことがなく、とても嬉しかった。たった一万円でこんなにいいことばかりおきていいのかと思った。これから先、日本と中国は、今よりもっとお互いの距離を縮めていくべきである。中国のことを知らずに中国のことを嫌うなら、ニュースにばかり気をとられなくて自分の目で確かめてほしいし、隣国でありかわる機会が多いのだから、もっと多くの人に興味を持ってほしい。その先には自分が今まで知らなかった世界が待っており、そうすることにより偏見もなくなると信じている。自分にとってこの五日間はそう感じた時間だったし、中国だけでなく、ほかの国にも共通して言えることだと思った。このプログラムは、二月から留学する自分にとって、行く前に知っておくべきことや中国の現状を知るいい機会となった。このプログラムで学んだことを、これから先の人生に生かしていき、異文化理解ができる人間になりたいと思った。

「日中から世界へ ～訪中を終えて考えたこと～」 南部陽香

私は以前までテレビや新聞などが取り上げる経済や政治などの中国の悪い側面ばかりを鵜呑みにしており、率直に言うと、頭ごなしに中国が嫌いだと感じていました。しかし大学生となってから三重県日中友好協会の活動に参加させていただく機会をいただき、多くの中国人の方と接する機会がある中で中国に対する見方が大きく変わりました。そのような中で今回の訪中への参加は実際の中国に触れ、日本と今後どんな友好関係が築いていけるだろうかと考える機会となりました。

まず、毎回の食事から感じ取ったことです。中華料理の代名詞とも言うべき円卓テーブルの上には所狭しと、料理が大量に盛り付けられたお皿が並べられ、美味しかったですがとても 10 人のグループでも食べきれないだろうという量でした。中国では料理を少し残すことが「美味しかった」という表れだということは聞いていましたが、それ以降の食事でも山盛りの料理を提供してもらっていましたが、食べきれず残してしまうことがとても申し訳なく思いました。帰国してから中国からの留学生にこのことを話しましたが、やはり残すことが礼儀であり気にしなくていいと言われました。

これも1つの文化であり、尊重すべき点ではありますが、しかし環境問題のことなどを考えると、食品ロスは大きな問題であると私は思います。また、空港や街中にあるゴミ箱は「リサイクルできるゴミ」「リサイクルできないゴミ」の最大二択しか私は見る事ができませんでした。日本も環境問題への意識はあまり高い方ではなく、ヨーロッパ諸国に比べるとはるかに劣っており、日本と中国は二酸化炭素排出量上位5位に入っています。中国と日本が環境問題への意識を高め、ともに協力してこの問題に取り組んでいくことが、東アジアをはじめとしたアジア全域、世界の環境に対する意識の変化につながれば良いと思います。

また北京城市大学を訪問したり、我々の訪中の歓迎会や人民大会堂での交流大会で現地の大学生との交流の場があり、熱烈な歓迎を受け大変嬉しく思いましたが、私の積極性が足りなかったのもあると思いますが、直接に長時間現地学生と交流する機会が非常に少なかったと感じました。大きな会場に数百人、千人規模で日中の学生が集まる機会というのはなかなかあるわけではなく、日中の学生がお互いに意見交流ができる時間が多くもらえるのではないかと感じていましたが、お話を聞く時間や出し物を見る事が多く、なかなか日中の学生が話し込むことはできませんでした。

つまり今回の訪中団では、正直に言いますと「大人」の方による形式の日中青年交流がなされたのであり、若者同士が直接に交流したわけではないと私は考えました。2019年は日中青少年交流推進年ということもあり、今後5年間で青少年3万人の交流と相互訪問が決定されたわけですが、これも「大人」が決めたことがあり、次世代を担う若者自身が決めたわけではありません。よって今後の日中の友好関係は、将来を担う現在の青少年・若者が自主的に交流を行うという意識を持つことが最

も重要になるのではないかと思います。また、「日中交流をする」という形式にとらわれて中国人だから、日本人だから交流するのではなく、友人がたまたま中国人・日本人だったという関係の方が大きな日中友好関係につながるのではないかと、私の経験が物語っています。(私の場合、三重県日中友好協会という場でできた友人が中国人であり、その子のバックグラウンドを知りたいという意味で今回の訪中団に参加し、たくさんの中国の魅力を知れたため、大変意義のある旅ではありました。)

中国は現在世界でトップを争う大国となりました。それほど影響力を持っているということの表れです。その中国が各国と一衣帯水の関係を作ろうとしており、その1国に日本が選ばれています。中国と最も物理的にも文化的にも近い関係である日本が、友好関係を結ぶことが、世界各国が友好関係を結ぶきっかけとなれば良いと私は望みます。各国が対立しては、環境問題や民族問題など世界に溢れる数々の問題は、解決するものも解決しません。その問題解決の一步を、現在の若者である私たちが日中交流によって始めていきたいと思います。

「初めての訪中を終えて」 藤田弥帆香

今回が、私にとって初めての中国訪問だった。この春から中国学科に所属し中国語を本格的に学び始め、また中国語劇団で役者として発音の向上に力を入れてきたため、それがどれほど通用するのか試してみたい、というのが一番の参加動機だった。また、単純に、大好きな中国の生の空気を感じ、街並みや建造物を見たり、本場の中華料理を食べてみたい、という思いもあった。この四日間の素晴らしい体験を時系列順にまとめていきたい。

まず、日本国内での事前研修。参加にあたっての注意点や日程が詳しく説明された。学生同士が初めて顔を合わせる場でもあった。私は参加者の中で最年少だったが、グループ内は明るく頼れる先輩方ばかりだったので、不安はすぐに解消された。事前研修の中で、この訪問は中国政府の多大な支援によって成り立っているという話があった。それを聞き、日本の大学生の代表の一人として、恥じない行動をとらねば、と背筋が伸びる感じがした。事前研修の後、空港に来ることもめったにないのだから少し散歩しよう、ということになり、友人たちと空港の中を少し歩いた。その最中、ある一人の女性に、第2ターミナルに行く道を尋ねられた。せっかくなのでバスの乗り場まで案内しようということになり、一緒に歩いた。話を聞くと、彼女は中国人で、偶然にもこれから私たちが行く、北京に帰るところだった。早速旅の始まりを感じ、とてもわくわくした。一緒に案内した友人が後ほど彼女と連絡をとると、どうやら彼女は私たちを空港の職員だと思って道を尋ねてきたようだった。スーツの4人組が空港内を闊歩していたら間違えるのも無理ないね、と友人と笑いあった。また、北京を案内してあげようか、と提案もしてくれた。偶然道案内をただけなのにそれほど気にかけて、もてなそうしてくれるのは、中国人の国民性でもあるような気がして、とても嬉しかった。

北京に着いて1日目、まず驚いたのは、思ったよりも過ごしやすい気候だということだ。冬の北京では、氷点下を記録するのは日常茶飯事である。そのためかなり恐恐としていたが、到着してみると、寒くて空気が非常に冷たいものの、耐えられないほどではなかった。これから体験する様々なことに胸を膨らませながら、北京滞在がスタートした。初日は驚きの連続だった。交通量は非常に多く、至る所からクラクションの音が聞こえる。町の看板は当然ながら漢字だらけで、自分は今、中国にいるのだと強く実感した。この日最も印象に残ったのは食事だ。円卓に色の濃い、いかにも中華料理、というような皿が並んでいた。それぞれの皿には料理が山のように盛り付けられていて、とてもその卓の人数で食べきれない量ではなかった。と思っていると、次から次に別の料理が運ばれてきた。中国では、食べきれないほどの食事を出すのがもてなしとされることは知っていたが、それでも少し面食らってしまった。また、この研修中、計8回中華料理店で食事をしたが、それぞれの店で用意されていた飲料はすべて同じ2種類の炭酸飲料とジャスミン茶だった。それほどこのジュースがポピュラーなのか、と帰国後、大学の先生に聞いてみたが、もちろん他のジュースを飲むこともあるという回答だった。私は炭酸飲料が苦手なため、滞在中の食事では常にジャスミン茶を飲んでいたので、帰国後もジャスミン茶を飲むと容易に中国の香りを思い出せるようになった。

2日目は天安門を訪れた。テレビでよく目にするあの建物を見たときは、非常に感激した。授業で紫禁城についてのビデオを見た際、その中で紹介されていた火災時用の瓶を見た。また、それぞれの建物の屋根の淵に小さな生き物が並んでいるなど非常に凝っていて、とても美しかった。多くの壮大な建築を見て感激したと同時に、中国やこれらの建物の歴史についてもっと知識があればさらに楽しめただろう、と事前学習の不足を悔やんだ。この日の夜は日本青少年代表団歓迎会が開かれた。同じ卓に座った現地の学生と、中国語と英語と日本語を織り交ぜながら話をした。話したいことはたくさんあるのに表現がわからず口に出せない、歯がゆい思いをした。また、発音もあれほど練習したのに、1回で聞き取ってもらえないこともあり、さらなる練習の必要性を感じた。歓迎会の中では、日中両国の学生によるパフォーマンスが披露され、とても楽しかった。日本の「オタ芸」を現地の学生が披露しており、その完成度の高さと、日本の新しい文化に興味を持っているという事実非常に感激した。

3日目は万里の長城を歩いた。まずバスから降りて驚いたのは、服装を誤るとすぐに凍ってしまうのではないかと、というほどの寒さだった。想像以上に傾斜が急で階段の高さが一定でなかったため、とても歩きづらく、頂上までは遠い道のりに感じた。

先ほどまで凍てつく寒さに震えていたのに、30分後には上着を脱いで、汗を垂らしながら歩いていた。道中、他の観光客と励まし合いながら登ったのはいい思い出だ。苦勞して辿り着いた、上からの景色は格別のものに思えた。また、その後訪れたショッピングセンターでの買い物も忘れられない。中国では買い物の際、値段交渉をする文化があるとは聞いていたが、想像していたよりもさらにそれは盛んで、ショッピングセンター内のお店でも通用し、当初の店員の言い値の半額もしくはそれよりも低い値で売買が行われることが往々にしてあることに驚かされた。中国に住んでいた経験のある友人に助けをもらいながら、私も値段交渉を経ての買い物を楽しんだ。その友人は非常に値段交渉が上手く、店員も彼女とのやりとりを楽しんでいるように見えた。次回中国に来たときは、彼女のようにもっと店員とのやりとりを楽しめるようになろう、という目標もできた。

4日目は中日青少年友好交流大会が行われた。あの人民大会堂で開かれるなんて、と非常に楽しみにしていた。事前に立派な招待状をいただいたり、建物に入る前に厳重な検査があったりと、身が引き締まる思いがした。会の中で、中日青少年交流促進年についてのお話を聞いたり映像を見たりして、今回この研修に参加させてもらえたことがどれほど貴重で素晴らしいことなのかを実感することができた。大学の授業で教わった「朋友」を日中両国の出席者全員で歌ったときは、感慨深いものがあった。この日の夜は今回の北京訪問の最後の晩餐であり、ひときわ豪華な食事をいただいた。本場の北京ダックは臭みがなくて柔らかく、非常に美味しかった。

ここには書ききれないほど、多くの体験をし、忘れられない思い出と大切な友人ができた。強い多幸感とともに、もっと懸命に学ばなければ、という強い意識も生まれた。今回この研修を支えてくださった日中両国のすべての関係者への感謝の気持ちを忘れず、この研修中での反省を生かし、さらに精進していこうと思う。

「中国の印象」 前田 光飛

今回の訪中は私にとって非常に貴重な体験となった。中国学科の学生として、身をもって中国を知ることがいかに重要であるかということは自明である。私はこの訪中を通して、自分が専門として学んでいる国がどういう国なのかについて、今日の中国人の学生が日本との関係についてどう考えているのかについて知る、また自分の中国語のレベルを確認するという目標があった。

まず中国がどういう国であったかについてだが、多くの日本人が持っているような「汚くて、人々は卑しい」というようなものでは決してなく、「非常に寛容で美しい国であった」というのが率直な感想である。私たちの班は「百聞は一見にしかず」をテーマとして掲げ今回の訪中に臨んだかまさにその通りの結果に終わったことを嬉しく思う。今日、メディアの影響で中国に対してあまり良くない印象を持つ日本人が多い。実際に今回の訪中団の団員にも「中国って意外と綺麗」とか「中国人って意外と優しい」と口にしていく人もいたくらいである。しかし、この訪中で多くの日本人の学生が中国に対する印象を大きく変えたのではないだろうかと思っており、このことが日中友好の小さな第一歩に繋がるのではないかと考える。

次に中国人の学生が日本をどう考えているかについてである。今回の訪中の中で何人かの中国人学生との交流をする機会があり、彼らに共通していたのは「日本が好きである」ということだった。もちろん何人かが日本が好きだからと言って、中国人全体が日本が好きであると言うことはできないが、私は日本人として「日本を好いてくれている中国人がいる」という事実を知ることができてよかったと思っている。日中関係が完全に冷え切っていたころから、大きくその関係が改善してきていることの証拠だからである。

そして私の中国語のレベルを確かめるという目標についてだが、まず自分の話す中国語が中国人に通じたことに大きな喜びを感じた。これは在中国日本大使館で働く方の言葉であるが、今日、すでに翻訳機やスマートフォンを使えば簡単にコミュニケーションが取れてしまう時代であるが、そのような道具に頼らずに直接、中国語という道具を使ってコミュニケーションをとった方が機械ではたどり着くことのできない領域でのコミュニケーションがとれるということが外交において極めて重要であるという話を聞いたことがある。私の中国語のレベルはまだまだ低く、円滑なコミュニケーションをとることもほとんど出来なかったが、「トイレはどこですか」「トイレはずっと歩いたところにある」程度の会話でも私にとっては非常に大きな国際交流の体験となった。

最後に私は今回の訪中の経験を今後の自分にどう活かしていくかについて考えた。私は中国学科で中国を専門として学んでいく中で今後中国と深く関わっていくが、訪中のなかで最も価値があると感じているのは、交流のなかでできた中国人の友人であり、「日中の友好」の観点から、そして「自分自身」にとっても非常に大きな意味を持つ存在であると考えている。そして現在、私は夏季の短期留学、一年の交換留学を予定しているがこれらの留学で目標に掲げていた「中国語の習得」に加えて、「日中の友好」という大きな目標が加わり、一層私の留学が豊かになることを期待している。